

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between Preconception Dietary Fiber Intake and Preterm Birth: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠前の食物繊維摂取量と早産の関連: エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名: 福島ユニットセンター
サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Nutrients

年: 2024 DOI: 10.3390/nu16050713

筆頭著者名: 小元 敬大

所属 UC 名: 福島ユニットセンター

目的:

本研究では、妊娠前の食物繊維摂取量と早産の関連について検討することを目的としました。

方法:

エコチル調査の参加者のうち、生児を出産した妊婦を対象としました。食事調査票から算出された妊娠前から妊娠初期にかけての食物繊維摂取量に応じて参加者を5グループに分類しました。食物繊維摂取量に応じた早産の発症リスクを比較しました。解析時に、妊婦の年齢や体格、喫煙や飲酒の有無、高度な不妊治療の有無、学歴や収入といった社会背景、妊娠中のストレスの有無、妊娠前と妊娠中の各種栄養摂取量、妊娠に伴う合併症の有無などの背景因子を考慮しました。

結果:

エコチル調査の参加者のうち、85,116人が解析対象者となりました。解析の結果、妊娠前の食物繊維摂取量に基づいて分類された5つのグループの中で、最も摂取量が少ないグループと比較して、摂取量が増えるにつれて妊娠34週未満での早産が少なくなりました。具体的には、食物繊維摂取量が中央のグループでは最も摂取量が少ないグループよりも約22%少なく、2番目に多いグループでは約26%少なく、最も多いグループでは約32%少ないという結果でした。ただし、この傾向は妊娠37週未満での早産には見られませんでした。

考察(研究の限界を含める):

早産の病因として膈から子宮への細菌感染や炎症があり、特に妊娠34週未満の早い週数での早産との関連が強いと考えられています。本研究の結果から、妊娠前からの積極的な食物繊維摂取により腸内や膈内の微生物環境が良好な状態となり、早産に関連する炎症を抑える効果があるのではないかと考えられました。本研究の限界としては、早産に関連するほかの未知の要因が存在する可能性があること、医療行為による治療目的の早産と自然発生の早産を区別していないことが挙げられます。

結論:

妊娠前からの積極的な食物繊維摂取により妊娠34週未満の早産のリスクが減少する可能性が示唆されました。今後、妊娠前の食物繊維摂取量についてさらなる検討が必要とされました。

